

道徳教育を支える基礎的視点に関する考察 ～J. H. ペスタロッチーの道徳教育思想の分析を手掛かりに～

村野 敬一郎¹

古典的教育思想家(J. H. ペスタロッチー)の思索と実践の成果を日々の教育実践にどのように生かすかという観点から検討し、ペスタロッチーの道徳教育論を支える人間観、道徳概念の分析を通して考察した。彼の人間観・道徳観が示唆を与えるのは、教師が子どもたちに向き合う時の基本的価値観である。彼の指し示す人間像は、実存的な弱さを内に持ち、根源的な良くなりたいたいという小さな芽も宿している存在であること、善と悪、理想と現実の間を彷徨い、その彷徨うという経験の中で学び、自己を克服していける存在であること、善と悪の二面性を持ち、悪への傾向性をもちながらも善きものへの強い志向性も持つ存在であること(それゆえ信頼できるという認識を持っているということ)である。一方、子どもたちの中には教師の思い及ばない生活現実の中で生きている子どもたちも多い。ペスタロッチーの活動は社会現実との戦いの中でなされたものであるが、今の日本でも学校という枠内には収まらない課題が多い。しかし教育という営みは極めて社会的な営みであるから、それは生活現実との関わりの中でリアルに考えられていく必要があるだろう。教師は狭い教室という空間にその専門性を限定し、世の歪みなどに目を閉じている存在であってはならないだろう。そのような子ども観を有する教師の肯定的な眼差しと配慮のもと、生活現実のもつリアリティに触れる中で、自己克服を重ねる子どもの学びの必要性を論じた。

Keywords : ペスタロッチー、道徳教育、人間観、道徳概念

はじめに

専門職としての教職を支える柱は専門性と人間性とされるが、他の専門職と比して人間性の部分が強調されるのが教職の特色である。それゆえ教師教育にあたって人間性の教育は大きな課題となる。とりわけ道徳教育という課題を意識する時はなおさらである。さて本稿は、古典的教育思想家について学ぶことが教師教育に、ひいては道徳教育をはじめとする日々の教育実践に際してどのような意味を持つかという観点からの考察である。現在教育職員免許を取得するには、教育職員免許法施行規則の中で教育基礎理論科目の必修領域として、教育の理念・歴史・思想分野の履修が求められ、ごく普通にペスタロッチー、ルソーといった古典的教育思想家の思想にふれることになる。個別教育科学が進歩し、多くの科学的知見をもた

らしてくれる時代にあって、古典と呼ばれる教育思想について学ぶことの意義は何なのだろうか。このことは関係する学会の重要な関心事のひとつであり、たとえばここで取り上げるJ.H.ペスタロッチー研究の核となる学会である「日本ペスタロッチー・フレイベル学会」は2006年秋に開催された第24回大会のシンポジウムに「ペスタロッチー・フレイベルと現代—古典研究の今日的意味を問う—」というテーマを掲げ、会員3氏からの報告をもとに古典研究の今日的意味の検討を行っている¹⁾。ペスタロッチー研究に限らず、背景にはこのような古典研究の存在価値への危機意識が存在している。本稿ではかつて教育界で「神ペスタロッチー」とも言われるほど敬愛されたJ. H. ペスタロッチーの核となる道徳教育論のとりわけ基礎となる人間観、道徳概念の分析を通して、彼の思想を学ぶことの意味を考えていくことにする。

1. 宮城学院女子大学 発達臨床学科

1. 時代と格闘するペスタロッチー

ペスタロッチーその人の業績と人柄は校訂版と呼ばれる、合わせて40巻を超える著作集、書簡集を通して知ることができる。ペスタロッチーは一般的に「教育実践家」、「教育思想家」として知られるが、彼の思索と実践は政治、経済、産業、宗教、道徳など広範囲に及び、その著作もいわゆる教育以外のものが多くを占めているのは意外かもしれない。しかしペスタロッチーの教育の思索と実践は、これらの直接的な関わりは欠くと思われる分野の思索と実践が収斂したものとして立ち現われてきているところにその特質があるといえるだろう。筆者は「教育者」ペスタロッチーの特質を「愛国者」ペスタロッチーと総括できると考えているが、彼の「教育」の課題は祖国スイス救済を課題とするものだったといえる²⁾。それはたとえば彼の「祖国の唯一可能な救済を教育のための努力の中に求める³⁾」という言明の中に明瞭に示されているとおりでである。彼の教育をめぐる課題は当時の社会現実が直面する様々な課題の中に教育の課題として見出されたものであることに特色があるといえるだろう。

さてペスタロッチーの生きた時代は経済、産業の観点から見れば、農業中心の社会にマニュファクチュアが浸透し、工業化が進むことにより、多くの農民たちの生活が変化していった時代である。工業化に伴い産業構造や経済のシステムが変化することによって、農民たちは従来のように農業に頼るだけでは生計を営むのが困難となった。彼らは新たな収入源として家内工業などを副業とし多くの収入を得ることにはなったが、それは人々を享樂的な生活へと駆り立て、浪費と怠惰の生活に追い落とすものであり、結局更なる貧困へと人々を導いた。そのような民衆の置かれた現状をペスタロッチーは牧師であった祖父のもとで目の当たりにし、そうした民衆の姿を小説『リーन्हルトとゲルトルート』にも描き出している。更なる工業化の波は農民たちを工場労働者へと仕立て、熟練を要しない単純労働は年少労働をも可能とした。没落した農民たちは賃金労働者として、低賃金、

長時間労働を余儀なくされるようになり、女性や子どもたちまで労働力として狩り出された。そのため彼らの家庭では深刻な家庭崩壊が始まっていた。ペスタロッチーにとってこうした人間性の疎外された「悲惨な生活」から人々を救い出すのが生涯をかけた課題となった。その際たとえば恩恵的な経済的救済の道を探ることは直接的な解決法であったかもしれない。しかし彼はそのような道をとらなかった。これらの問題の責任は結局のところ「文明の墮落」によるものであり、もとを糺せば「人間の墮落」にあると考え、真に民衆の救済を図るとすれば人間それ自身の陶冶が目指されるべきであった。「人間らしさへの陶冶、人間陶冶以外に道はない⁴⁾」と、彼は民衆陶冶を生涯の使命、課題としていったのである。

一方、政治、社会的な観点から見れば、ペスタロッチーの生きた時代は、フランス革命を中心とする市民革命によって絶対主義体制が倒れ、ナポレオン失脚後、再び旧体制が復古するという、ヨーロッパ史の中でも有数の激動の時代である。時代の推移にあわせてペスタロッチーの政治や社会をめぐる思索も変化を見せている。初期の作品『隠者の夕暮』、『リーन्हルトとゲルトルート』では素朴な家父長的な国家観がみられる。『リーन्हルトとゲルトルート』に登場する賢明で慈愛ある城主アーナーはそれを具体的に体現するものとして描かれ、民衆は君主の「親心」が作り出す上からの秩序のなかで安らうのである。ここには君主政体への素朴な期待が見て取れる。しかしフランス革命とその後の恐怖政治、ナポレオンによる専制政治、スイス革命の推移を目の当たりにする中で、彼は「我々の良き君主の家父長的な道徳はもはや役には立たない⁵⁾」と君主政体・家父長的道徳に絶望し、むしろ「政治は政治自身のためにあるのではなく、国民のためにある⁶⁾」、「祖国よ！私に言え。スイスは国民の意志と国民の信頼と国民の選択以外の何によって築かれたのか⁷⁾」と民主主義的志向を強めていくことになる。彼は「すべての国、とりわけすべての自由国は、個々人の道徳的、精神的、市民的価値によってのみ社

会的に立ちいくことができる」⁸⁾と考へ、彼にとって政治の課題は社会を支える国民の人間教育の課題として浮かび上がってくることになる。ペスタロッチーは社会と時代を取り巻く課題と格闘することを通して、それらの課題の中に教育の意味と課題を見出し、その解決の方途を探ることになったのである。

2. ペスタロッチーの道徳教育を支える基礎概念

(1) 道徳教育の基盤としての人間理解

ペスタロッチー自身の追究の課題が政治であれ経済であれ教育であれ、人間が支えるものである限り、人間の本質をどう理解するかが彼の思索と実践の出発点となっている。彼の人間理解の原点を示すのが『隠者の夕暮』であり、続く『リーナハルトとゲルトルート』である。そして必ずしも体系的ではないが、まとまった全体像を提示しているのが『探究』である。以下で、これらの著作の分析を通して、彼の人間理解の特徴を見ていくことにする。

まず長田新が「ペスタロッチーの思想は『夕暮』から発して『夕暮』に還るといい⁹⁾と評価する彼の教育思想の原点ともいべき『隠者の夕暮』をみとめることにする。その冒頭で「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住んでも同じである人間、その本質における人間、その人間とは一体何なのであろうか¹⁰⁾と述べている。身分などにかかわらずすべての人間は平等であるということを高らかに謳うが、そこに彼自身の人間観を根底で支える考え方が示されている。そのうえでそのような「人間の本質」とは何か問うている。この問いには同時に「なぜ崇高な精神の持ち主たちは人類が何であるのかに気づかないのか¹¹⁾という「人類の本質」への問いが続いている。ここには人間を孤立的な存在として見るのではなく、常に人類の一員として捉えようとする姿勢がみとれる。彼が「人間社会という現実世界のなかで生きて活動している人間を対象として、具体的に考察を進め¹²⁾、決して観念的、抽象的に人間を理解しようとしているのではないことが

わかる。その意味でジルバーが指摘するように「人間とは何か」という理論的な問いは常に「何を必要とするか」という実際的な問いに変化し¹³⁾、「人間とは何であり、人間は何を必要とし、何が人間を高め、また卑しくするのか、何が人間を強くし、そして弱くするのか¹⁴⁾と、人間を探究するにあたっての具体的な課題が提示されている。人間とは何者なのか体系的に語られるわけではないが、ここにペスタロッチーの人間探究の基本的な特質がある。さてここで具体的に彼が指し示す本質的な人間像とは、「内的な安らぎ」に満たされた人間である。彼によれば「人間は内的なやすらぎへと陶冶されねばならない¹⁵⁾」のであって、この著では「人間陶冶の第一の目的¹⁶⁾」である「内的な安らぎ」に至る道筋が指し示されている。ペスタロッチーはその道筋を「自然の道」という言葉で説明し、人類の家庭的関係こそが「最初の、最も優れた自然の関係」であると説明している。のちの著作では彼の教育思想の中核として家庭教育について詳細な考察が展開されている。それゆえ家庭こそが「人類の純粋な自然的陶冶のすべての基礎」であると考え¹⁷⁾、さらには社会、国家であってもこの家庭のあり方と同様に秩序立てられることを求めている。ところでペスタロッチーのいう「自然の道」の核心をなすものは「神への信仰」であり、「神への信仰は、あらゆる知恵とあらゆる恵福の源であり、また人類の純粋な陶冶のための自然の道である¹⁸⁾と説明している。彼にとって宗教の問題は人間陶冶にとって極めて重要な意味を持つものである。ペスタロッチーにとって、もとより人間は「善と悪に関する感覚」や「正と不正に関する消すことのできない感情」を不変的に確固として我々の本性の深奥に持つ存在であり¹⁹⁾、人間は本質的に善悪、正邪併せ持つ二面性のある存在であると理解している。しかし神への信仰もまた同時に人間の本性のうちにあるものであり、「神への信仰は、いかにどん底の身分にあっても、世界の各地においても民衆の分け前であり、いかに高い身分にあっても人類の力であり、いかにどん底の身分にあっても人類の強みで

ある」²⁰⁾のであると確信している。この確信がゆえに、善悪の二面性を持つ存在にも希望を抱いているのである。格言集的に書かれた本書では人間のあるべき姿が目標として示されるだけである。だからこそ、その基調は本質的に楽天的なものである。人間は善悪併せ持つ存在であるが、それでもなお人間存在そのものを肯定的に理解する姿には人間の善性に対する素朴な信頼感を見て取ることができる。

一方ほぼ同じ時期に民衆小説という形で書かれた『リーンハルトとゲルトルート』では当時の社会状況に翻弄される貧しい農村の中で生活する人々の姿が生き生きと描き出されている。その中には『隠者の夕暮』には見られなかった「悪」の本性を体現する人間が登場する。悪代官であり、居酒屋も兼業し、農民たちを誘惑してはなげなしの稼ぎを巻き上げるフンメルである。人間とはその本性上、「怠惰で、無知で、不注意で、無思慮で、軽薄で、だまされやすく、臆病で、際限なく欲張りであり」、「彼の貪欲さが行き当たる危険、彼の脆弱さ、障害によってねじれ、抜け目なく、陰険に、疑り深く、暴力的に、向こう見ずに、執念深く、そして残酷になる」²¹⁾存在だと考え、悪しき本性を持つ人間像を具体的に描き出している。しかし彼も「我々と同じ人間であった」し、「我々の中の誰一人としてこの不幸が自分に起こらないとも思えない」²²⁾と、明らかに『隠者の夕暮』のそれとは異なる人間理解である。単純に人の善意を信じる善良な牧師についても「親切をもって人間を腐敗させるだけだ」²³⁾と手厳しい。ここにみられるペスタロッシーは人間の本性がもはや無制限に善であるとは信じていない²⁴⁾ことを示している。ただ同時に彼の描き出す人間像は明確な悪だけではない。悪の対極として描かれる良妻賢母ゲルトルートの夫であるリーンハルトは、フンメルの誘惑に負け借金を重ね、妻と子どもたちをひどく不幸にしている「善良な人」である²⁵⁾。また領主の祖父は「善良な年老いた恵み深い紳士」²⁶⁾であったが、悪代官に騙され領民を不幸にしまった人である。ここには善良ではありながら人

の悪と連なってしまう人間存在の危うさが示されている。光田の言葉を借りれば、このペスタロッシーの人間理解は「善なるものうちにも潜む人間の弱さや危うさをあぶりだし、新たな人間学の地平を開い」²⁷⁾たものといえるだろう。ペスタロッシーの人間に向ける眼差しは決して厳しいものではない。むしろ優しい。フンメルの悪もその生い立ちからその後の人生を描出することで、環境ゆえの悪にすぎないと説明している。ここに示される人間は確かに単純に善なる存在ではありえず、悪なるものと背中合わせの存在であり、常に人間的弱さ、危うさを併せ持つ存在にすぎない。しかしそれらの悪も弱さも一方で克服しうる事柄でもあると彼の人間理解は深化を遂げることになる。

ペスタロッシーの人間探究のひとつの総括となるのが『探究』であり、彼の人間の本質の体系的な説明が試みられている。そこでは人間存在を動物的状态、社会的状態、道徳的状态の三重構造を持つものとしてとらえ、それぞれ動物的存在、社会的存在、道徳的存在として把握し、同時に個人を発展史的に理解すればそれぞれが幼児期、青年期、成人期に相当するものと考えている²⁸⁾。結論的に言えば、この書で示される彼の人間像の特色は、「私は、自分自身において三重の異なったもの、すなわち動物的存在、社会的、道徳的本質である」²⁹⁾、「私の自然においては、動物的存在、社会的、道徳的諸力は別々にではなく、むしろ極めて密接にお互いに結びついてあらわれる」³⁰⁾という説明に示されるように、人間は異なる本質を同時に併せ持っている存在だという点にある。その内容を以下でみておこう。「動物的存在」としての人間は「本能の子」であり、本質的に「好意」と「利己心」を併せ持つが、自らの欲求だけを満たそうとする限り、他者との不和を引き起こし破滅するだけである。だから人間は「社会的存在」として自然状態を制限することによって³¹⁾自らの欲求を満たそうとする。法や契約などがそれである。しかし「社会的状態はその本質において万人の万人に対する戦いの継続である」³²⁾のであって、動

物的状態の本質は「社会的状態においても形を変えるだけ」³³⁾に過ぎず、両状態とも本質は同じである。いずれの状態も人間を満足させ完成してくれるものでもないのである。それゆえ人間は「私の動物的欲望や社会的諸関係とは無関係」³⁴⁾な人間的な状態を求めるが、それが「道徳的状态」であり「道徳的存在」なのである。それは彼が「死の飛躍」³⁵⁾と呼ぶ動物的社会的状态を克服した、個人の意志の自律によって成り立つ質的な変化を果たした姿である。彼のたどり着いた人間像は、異なる本質を自らのうちに併せ持つ存在である。「私は動物として生きることも、あるいは市民として生きることも、あるいは道徳的人間として生きることもできる」³⁶⁾存在である。しかし現実を生きる人間は「私の動物的不純気と私の道徳的純粋さとの間であって迷える墮落した中間的存在」³⁷⁾として揺れ動く存在でしかないのである。だからこそそこに教育の必要性と可能性がでてくることになり、それは道徳とどう向き合うかという問題ともなるのである。

(2) ペスタロッチーの「道徳」概念の特質

「墮落した中間的存在」としての人間が自らを克服する課題としての「道徳」とはどのようなものか、引き続き『探究』における道徳概念の分析を通して、その特質とそこから発する道徳教育の特質を見ていくことにする。

『探究』の中で展開される道徳とは、端的に言えば、人間の内面的な高貴化を図ることに集約されるものであり、内面的な高貴とは、利己心を克服し、自然的社会的自己を克服し道徳的存在となることである。道徳が課題として浮かび上がってくるのは、社会的存在としての人間においてである。そのような人間は単なる動物的な感覚的な享樂の境地に安住できず、さりとて市民として申し分なく育成された境地にも安住できない³⁸⁾、「動揺の中に生き浮動している」³⁹⁾存在にすぎない。しかしそのような社会的存在としての人間には「墮落した自然の作品(動物的存在：筆者注)としての自分自身に屈服することを免れるためには、

彼はただ自分自身の作品(道徳的存在：筆者注)となるほかない」⁴⁰⁾と、「社会的硬化の墮落を乗り越え高く自らを上げる」⁴¹⁾ことが、つまり社会的存在という自己自身以上のものに高まる努力が人間にはその本性として求められているとペスタロッチーは考えている。ペスタロッチーは道徳について以下のように説明する。「もともと私の道徳は私が私自身を高貴化しようとする、あるいは普通の言葉でいわゆる正しく行動しようとする、純粋な意志を、私の認識の一定の型および私の境遇の一定の状態に結びつける方法にほかならず、また私が父として子として官吏として臣下として自由人として奴隷として、すべてこれらの境遇において私自身の利益や私自身の満足を求めるよりも、むしろ私が配慮し世話し保護しその権利を重んじ、また服従し信頼し感謝し献身すべきであると私が確信するすべての人々の利益と満足とを求めようとする純粋で正しい努力をする方法にほかならない」⁴²⁾ものである。道徳とは利己心を規制する自律的な力、自己規制力を意味しているといえるだろう⁴³⁾。ここには確かにたとえばシュプランガーが指摘するようにカント流の自律思想を思い起こす⁴⁴⁾。しかしペスタロッチーは道徳の根源は「無邪気」「動物的好意」にあり⁴⁵⁾、そしてこの「動物的好意」が高貴化されることによって「愛」が生まれると考えている⁴⁶⁾。先の引用の中に示された「純粋な意志」は「愛」を指したものであり、ペスタロッチーの考える道徳は愛をその本質とすることによって、理性による定言命法を根拠とするカント的な道徳とは異なるものと言えるだろう。また、彼にとって道徳は自らを克服し高める力であるが、社会的存在としての人間は先述したとおり、動物的不純気と私の道徳的純粋さとの間であって迷える墮落した中間的存在としての姿をもち、「この中間的状态の衝動と諸経験とをふるることによってのみ、真の、そして私の自然と私の境遇とをあますところなく包んでそれらを完成させる道徳を認識しうようになる」⁴⁷⁾という説明を併せ読むとき、ペスタロッチーの道徳は、動物的・社会的・道徳的諸力が互いに緊密に

結び合ったものとして⁴⁸⁾、決して純粋道徳ではない、様々な現実社会の関係性の中で生きぬく人間のものとしての道徳であるということを特色としていることを良く示しているといえよう。

3. 道徳教育・教育実践を支える基礎的視点

以上ペスタロッチーの道徳教育を支えている人間理解と道徳概念の分析を行いながら、ペスタロッチーの思索の特色をみてきた。それが我々の教育実践に示唆してくれるものは何か。

ペスタロッチーの実践は、産業構造の変化に伴い急速に変化する社会生活の中で家庭という生活と学びの場を失った、またフランス革命の影響を受け孤児とならざるを得なかった、時代に翻弄される子どもたちを、そのような社会の中で生き抜いて行ける道を人間陶冶という形で探るものだった。私たちは今を生きる子どもたちにどう向き合っていけばよいのか。現在の日本の子どもたちは果たして幸せなのだろうか。豊かと思われていた日本の社会はいつの間にか格差社会と言われ、多くの親たちは貧困と長時間労働に喘ぐことになった。親の貧困は子どもの貧困、教育格差の問題ともなってきた。学校という小さな枠内には収まらない多くの大きな教育の課題を背景に教師は子どもたちに日々向き合わなければならない。本稿で扱ったのは人間観、道徳観であるが、人の関係づくりの根底を形作るものであり、教師の子どもたちへの向き合う姿勢に関わることがらである。

ペスタロッチーは本質的な人間、子どもの姿を私たちに教えてくれる。子どもたちは社会的状態にある人間としてどんなに荒れた姿を見せようとも実存的な弱さを内に持ち、また根源的な良くなりたいたいという小さな芽を宿している存在であるという認識、人は善と悪、理想と現実の間を彷徨い、そしてその彷徨うという経験の中で学び、自己を克服していける存在であるという認識がそれである。ペスタロッチーの人間を見る眼差しは優しい。人間は善と悪の二面性を持ち、いくらでも悪への傾向性をもつ存在で、その点では自分とて同じであるが、一方、善きものへの強い志向性も持って

いるがゆえに、信頼できるという認識を持っている。この人間への素朴な信頼感が彼の基本的な姿勢となっている。彼の実人生ではこの信頼感がゆえに裏切り、挫折を経験することにはなるが、教育の世界に大きな足跡を残すことになった理由の一つでもあったといえよう。これらがここで彼の指し示してくれる人間理解である。教師として子どもたちへ向き合う際の基本的な視点や立場を教えてくれるものだろう。現在教員免許状更新講習は「教職についての省察」の中に子ども観や教育観の省察をその必修内容として盛り込んでいる。今更なぜと必ずしも評判の良い部分ではない。確かにそれほど意識することもなく我々は何らかの価値観、しかも本人は良いと確信している価値観を背景に日々実践しているし、実践できる。しかしそれは我々の思いが子どもたちに届くものとなっているのか。ベテランになるがゆえに、慣れるがゆえに見えなくなっていくことも多い。その点で「省察」の持つ意味は大きい。とりわけ子ども観、教育観といった普段見えていないものを意識化し客体化して検討することの意味は大きい。そこにペスタロッチーのような古典的教育思想家の思想にふれることにも意味が見出せるのではないだろうか。ただ子どもたちの中には教師の思い及ばない生活現実の中で生きている子どもたちも多い。ペスタロッチーの活動は社会現実との戦いの中でなされたものであるが、先に述べたように今の日本でも学校という枠内には収まらない課題が多い。しかし教育という営みは極めて社会的な営みであるから、それは生活現実とのかかわりの中でリアルに考えられていく必要があるだろう。そのような時、教師とは、決して学級や担当教科の狭い枠内における単なる指導技術あるいは知識・技能の伝達技術という一面性にその専門性を限定し、世の歪みにも、政治の動向にも目を閉じて、いわゆる「20坪主義」に陥り、そのなかでしかもの言えぬ教師に留まるものであってはならない⁴⁹⁾だろう。

以上、ペスタロッチーの思索に教育実践のための手がかりを求めてみた。指し示されたことがら

は多いものではないが本質的なことであり、自らの価値観を「省察」する手がかりの一つになるかと考えている。自分自身の価値観の基軸は何なのか考える時、ペスタロッチーの次の言葉はひとつの大きな指針となるだろう。「人間の美しさは地上における最大の美しさである」⁵⁰⁾。

注

本稿で用いられたペスタロッチー全集については、次の略号をもって示す。

KA:Pestalozzi, Sämtliche Werke, hrsg. von A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, Kritische Ausgabe, Orell Füssli, 1927

※本文の訳出に際しては、○長田新編集『ペスタロッチー全集』(平凡社、1959-1960) ○東岸克好訳『隠者の夕暮』(玉川大学出版部、1989) ○田尾一一訳『リーンハルトとゲルトルート』(玉川大学出版部、1967)を参照した。

- 1) 『人間教育の探究』第19号(日本ペスタロッチー・フレール学会、2007年) P. 51~70
- 2) 拙稿「ペスタロッチーにおける祖国愛の変容と深化について—祖国スイス再生の道すじ—」(『人文社会科学論叢』第12号、2003年) P. 23~34
- 3) Brief, 5, S. 217
- 4) An die Unschuld, KA. Bd. 24A, S. 165
- 5) Ja oder Nein, KA. Bd. 10, S80
- 6) An die Unschuld, KA. Bd. 24A, S. 129
- 7) dito, S. 82
- 8) dito, S. 203
- 9) 『ペスタロッチー全集』第1巻(平凡社、1959年) P. 367: 訳者(長田新)解説
- 10) Die Abendstunde, KA. Bd1, S. 265
- 11) dito, S. 265
- 12) 福田弘『人間性尊重教育の思想と実践—ペスタロッチーの研究序説』(明石書店、2002年) P. 66
- 13) Käte Silber: Pestalozzi, Der Mensch und sein Werke, Heiderberg, 1957, S. 40
- 14) Die Abendstunde, KA. Bd1, S. 265
- 15) dito, S. 272
- 16) dito, S. 272
- 17) dito, S. 271
- 18) dito, S. 273
- 19) dito, S. 273
- 20) dito, S. 273
- 21) Lienhard und Gertrud, KA. 3, S330
- 22) Lienhard und Gertrud, KA. 2, S415
- 23) Lienhard und Gertrud, KA. 3, S173
- 24) Käte Silber, a. a. O., S. 72
- 25) Lienhard und Gertrud, KA. 2, S. 13
- 26) dito, S. 215
- 27) 光田尚美「教育と福祉の人間学—ペスタロッチーにおける「道徳的自立」の哲学を中心に」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』No.13、2010年、P. 71
- 28) Nachforschungen, KA. 12, S. 106
- 29) dito, S. 68
- 30) dito, S. 109-110
- 31) dito, S. 76
- 32) dito, S. 79
- 33) dito, S. 79
- 34) dito, S. 106
- 35) dito, S. 39
- 36) dito, S. 159
- 37) dito, S. 127
- 38) dito, S. 95
- 39) dito, S. 129
- 40) dito, S. 130
- 41) dito, S. 165
- 42) dito, S. 113-114
- 43) 乙訓稔「ペスタロッチーにおける道徳の概念と道徳教育」(『実践女子大学文学部紀要』第33集、1990年、P. 25
- 44) シュブランガー『教育の思考形式』(吉本均訳、明治図書、1963年) P. 36
- 45) Nachforschungen, KA. 12, S. S. 111, S. 34.
- 46) dito, S8
- 47) dito, S. 109
- 48) dito, S. 109
- 49) 前原壽編『教育原理論』(高山書店、1976) P. 270
- 50) Lienhard und Gertrud, KA. 3, S76

